

く」(p.284)とし、県知事制が導入されたという制度の「非連続性」をより重視する。そしてそれが本書の中心的主張でもある。

確かに県知事制の導入は、議会・人民行政委員会制からの非連続的な制度変更である。しかし、党が中央執行委員を県の党と行政のトップに派遣するメカニズムは1980年代中頃から始まっていた。つまり、党の地方管理メカニズムには連続性(中央執行員の派遣を通じた地方全体の管理)と非連続性(党による地方行政の管理)の両面が観察できる。

おそらく著者は党と行政の融合という前提から、県知事制導入を党による地方管理メカニズムそのものの変更と捉えているのだろう。もちろん党管理制度と行政管理制度は相互依存関係にあり、一方の変更はもう一方に影響を与える。とはいえ、ラオスは党と国家が「高度に」融合しているが完全に一致しているわけではない。党と国家の完全な融合としてしまうと、アブリオリに行政管理メカニズムの変更＝党管理メカニズムの変更(その逆も然り)となり、地方管理メカニズムのどの部分が維持され、どの部分が変更されたかを正確に捉えられないのではないだろうか。

第3の問題は論述についてである。著者は「序章」で中央・地方関係と地方行政を捉える上で4つの時代区分を行っている。その一方で第2章第4節ではそれとは異なる3つの時代区分を提示する。これは読者を混乱させる。また論述の矛盾や記述の不一致も多く、情報が体系的に整理されていないという問題もある。価値ある情報が多いだけに論述の問題はもったいなく感じた。

以上厳しい評価を行ったが、これはラオス政治研究の先駆者たる著者への評者による期待の裏返しでもある。これまで評者は著者の論文から多くのことを学んだ。著者がラオス政治に関して今後どのような知見を提供してくれるのか期待したい。

(山田紀彦・アジア経済研究所)

参考文献

山田紀彦. 2011. 「ラオス人民革命党支配の確立——地方管理体制の構築過程から」『ラオス

における国民国家建設——理想と現実』山田紀彦(編), 49-90ページ所収. 千葉: アジア経済研究所.

野中 葉. 『インドネシアのムスリムファッション——なぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』福村出版, 2015, xiii+224p.

I 本書の内容

近年、インドネシアでは、イスラーム式のヴェールを着用する「ムスリマ」(イスラーム教徒の女性)が目に見えて増加している。加えて、そのヴェールがカラフルなものになりつつある。それはなぜか。本書は、このような「ヴェール化」に関する素朴な疑問を分かりやすく解き明かしてくれる。著者はまず、ヴェール化を牽引してきた都市中間層の若い女性たちに焦点を当て、1980年代から現代に至るヴェール化が、様々な形態を取りつつ継続してきたという視点を持つ。この前提の上で、各時代の社会状況との関わりや、女性たち自身のイスラームとの向き合い方の変遷を捉えつつ、「女性たちのヴェール化の諸相」(p.7)を論じている。「諸相」とは、単に女性たちのイスラームとの向き合い方とヴェール着用に至るプロセスだけでない。ヴェール化に対するインドネシア社会の受け止め方や、イスラーム関連出版業界、ムスリムファッション業界、政府といった諸アクターの作用、ひいてはヴェール化から垣間見えるインドネシアのイスラームの特徴までを視野に入れ、多角的に論じている。以下、本書の構成と内容に入りたい。

第1章「ヴェールをめぐる様々な議論」では、ヴェールの言説、ヨーロッパや中東のヴェールに関する議論を整理し、インドネシアの女性たちのヴェール着用に関するこれまでの研究を概観している。イスラーム教徒の女性たちのヴェール着用の根拠は、イスラームの聖典であり、イスラーム教徒がその記述に従うべきとされるクルアーンの章句に求められることをおさえている。

第2章「インドネシアのイスラーム——『亜流』のイスラーム?」では、中東のイスラームとは趣を異にしたインドネシアのイスラームの特徴をまとめている。インドネシアにおけるイスラームの歴史と位置付けを明らかにし、1980年代から現代に至る社会のイスラーム化の進展を論じている。

第3章「『ジルバブ』着用者の出現と拡大」では、1980年代から1990年代の時代背景と照らし合わせながら、「ジルバブ」と呼ばれるヴェールを女子大生や女子高生たちが着用し始め、その動きが拡大していった過程を論じている。その拡大の背景には、1980年代、都市部の国立大学を拠点に展開する「大学ダアワ（宣教）運動」として知られるイスラーム活動が拡大していったこと、それに参加する女子大学生・女子高校生が増加していったことがある。彼女たちにとってのヴェール着用は、イスラームの教えに従うという自覚を伴うものであった。彼女たちは、自分たちのヴェールを伝統的でイスラーム的でない「クルドゥン」と差異化する意味で、「ジルバブ」と呼んだ。しかし、権威主義的なスハルト体制はヴェール着用を禁止した。当時、ジルバブ着用がムスリマの義務であることは社会的に認知されていなかった（p.37）。1980年代後半以降、ヴェール着用解禁を求めるデモが活性化し、その中で次第に「ジルバブ」という語が一般に定着していった。

第4章「ジルバブを着用した女性たちの証言」では、1990年代から2000年代初頭にヴェール着用を始めた女性たちの証言を丁寧にとりまとめ、世俗的な教育を受けてきたムスリマたちがジルバブを着け始めた理由やきっかけを分析している。証言によると、大学や高校のダアワに参加することで、イスラームを学びジルバブを着用した女性たちもいれば、イスラーム関連の書籍を読むことを通じて独学で勉強し、イスラームの良さを知り、ジルバブ着用に至るケースもある（p.68）。しかし、一般には彼女たちは限られたごく少数の女性たちであり、ジルバブ着用は、時に周囲の環境から決別するような「大きな決断」を伴うものであった（p.79）。色や形状としては、著者が調査した2004年当時は、大きくて分厚い地味なヴェールが主に選

択されていた。

第5章「女性向けイスラーム短編小説の広がり」では、1990年代から2000年代初頭にかけ、ジルバブ着用を始めた女性たちの多くが読んだ、女性向けイスラーム短編小説を取り上げ、その人気とブームの背景を論じている。これらのイスラーム短編小説は、女性たちにジルバブ着用の意味やイスラームの教えを分かりやすく伝え、女性たちの間で意識を共有することを促し、ジルバブ着用を継続させる役割を担っていた。

第6章「『ジルバブ』から『ヒジャブ』へ」では、2000年代前半から現在にかけての女性たちのヴェール着用に関する、主に2つの現代的な現象を論じている。第一に、ヴェール着用者が飛躍的に増大・一般化し、スタイルもより「現代的」になった。背景には、ムスリムファッション業界やメディアの発展により、ヴェールに対する肯定的な見方が広まり、若者のライフスタイルや流行に対応した「クリエイティブ」で「おしゃれ」なヴェールが供給されるようになったことがある。加えて、同業界と結託した政府の後押しがあった。政府は経済戦略の一環として、ムスリムファッションをクリエイティブ産業の一つとして位置付け、支援した（p.152）。第二に、ヴェールの呼称が変化した。これまでの「ジルバブ」に加えて新たに「ヒジャブ」という語が定着した。2010年のヒジャーバーズ・コミュニティの創設と拡大は「ヒジャブ」の語の浸透に貢献した。ヒジャーバーズの活動に参加した女性たちは皆、カラフルなヴェールを身につけていた。彼女たちは、大学ダアワ運動と結びついた「ジルバブ」の用語に内在する政治的でネガティブなイメージを払拭し、現代的な「ヒジャブ」の語を用いることで、イスラームの教えとおしゃれが両立可能であることを示した。

II 本書の評価

本書のスタイルは一般向けだが、その内容は学術的にも示唆に富む好著である。

最も評価すべき点は、本書が非政治的な「ふつうのムスリマ」に着目したことである。著者の主

張によると、「イスラーム復興やイスラーム覚醒は、社会や政治体制との関わりといった視点から言及されることが多い事柄であるが、インドネシアの女性たちのジルバブ着用に至る決定的な決め手は、実際には、個々人の信仰に対する確信や、一人一人の非常に個人的な体験に帰結するのだった」(p. 70)。これはインドネシア政治研究の枠組みにおいても興味深い指摘である。政治運動や宗教運動に直接的・積極的に参加する「目立つ女性」に着目し、政治性に還元しがちなインドネシア政治研究者にとって、本書の魅力的な主張は注目に値する。都市中間層のムスリマは、誰かに強制的にヴェールを着用させられ、政治的に利用されたのではない。著者が繰り返し強調するように、彼女たちは「自発的に」イスラームを学び、「自ら進んで」ヴェールを着用するに至ったのである。女性たちの中には大学ダアワ運動に関わったものもいるが、「多くの女性たちにとって、特定の集団や政党への傾倒はヴェール着用を促すきっかけにはなかったものの、一時的な動きであった」(p. 101)。さらに、2010年代にヒジャーバーズ・コミュニティの活動に参加した新しい世代の若い女性たちにいたっては、「大学のダアワ運動とは直接関わりがない。むしろ、その当時からのジルバブの持つ強いイメージは、現代のインドネシア社会にそぐわないと考える人々である」(p. 160)。

著者は、この重要な主張を丹念なインタビュー証言に基づいて裏付けている。脚注を見れば分かるように、各章の論証には、著者が実際に2004年から継続して実施してきた現地での女性たちや関係者へのインタビュー結果の内容を多く用いている。「彼女たちの生の声を通じて」、従来の一般論的視点を超え、地域に暮らす「ふつうのムスリマ」の内面世界を考察している点で、地域研究における学術的意義も大きい。

あえて問題を指摘するとすれば、本書の副題は、若干不適切ではないだろうか。全体を通読すると、「なぜヴェールはカラフルになったのか」(第6章に相当)よりも、「なぜヴェールを着用し、その現象が拡大したのか」(第3～5章に相当)に内容の重点が置かれている。おそらく「カラフル現象」は極めて現代的なトピックであり、本書の構成上、

相対的にその割合が小さくなった事情があるのかもしれない。とはいえ、「カラフル現象」がインドネシア社会特有の現象であるならば、当該現象の諸相を今後より多角的に分析するため、少し課題を提起しておく必要がある。「カラフル現象」解明のために本書の議論を補強する視点は、階層と消費の考察であろう。本書では、ヴェール化の拡大に関して、都市・地域を超えた横の広がりに触れているし(p. 157)、世代を超えた縦の広がりも指摘している(p. 31, p. 159)。しかし、階層間を超えた縦の広がりが不明瞭である。なぜなら消費行動の考察が抜けているからである。第6章で供給側の発展は詳細に述べられており、また都市中間層に焦点を当てること自体に問題はないが、彼女たち消費者が、どこで、どのような価格帯でヴェールを購入しているのかが明確ではない。仮定ではあるが、階層別の消費行動を分析することによって、階層間のスタイルの共通性・特性が明らかになるかもしれない。本書ではカラフルなヒジャーブを従来の地味なジルバブとの対比で論じているが、一つの可能性として、中間層が消費するカラフルなヴェールが、それにアクセスすることの困難な低所得者層と差異化するアイテムとしての役割を担っているかもしれない。それには、低所得者層のどこまでヴェール化の波が浸透しているのか、ヴェールのどこまでが手の届く価格で、どこで買っているか、それはカラフルなものなのか地味なものなのか、知る必要がある。

しかしながら、評者による以上のような外在的批判は、本書の価値を低めるものでは全くない。多くの一般の日本の読者がイスラームの一端を知るのに最適な一冊であるのは言うまでもない。本書が、インドネシアの巨大な消費市場、イスラーム市場に目を光らせる日本のビジネスマンの手に取られ、分野を超えた多くの研究者に参照されることを願う。

金悠進(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科)